

かす が かい し
春日懐紙

—変転を繰り返した紙の裏と表—

国文学研究資料館は、全国の国文学や歴史史料を調査し、それらを写真撮影することを業務としています。その一方、現物の古典籍の資料も多く収集しています。春日懐紙は、その代表的な資料です（国指定重要文化財）。春日懐紙とは、鎌倉時代、奈良の春日社（春日大社）周辺の神官、僧侶たちが、歌会のために自作の和歌を書き留めた紙です。これらは、歌会が終わると、廃棄される運命にあったのですが、当時の春日若宮社の神主中臣祐定が、それらの裏に、奈良時代の歌集『万葉集』を写し、袋綴じの冊子本に仕立てました。つまり、これらの懐紙は、長い間『万葉集』（春日本と称されます）の裏になって伝来してきたのです。ところが、江戸時代になり、春日本の裏に鎌倉時代の筆跡が存することが分かり（江戸時代では鎌倉時代の自筆の和歌はすでに貴重な物となっていました）、春日本の綴じが外され、裏の和歌懐紙が再び日の目を見ることになったのです。これが後に春日懐紙と呼ばれ

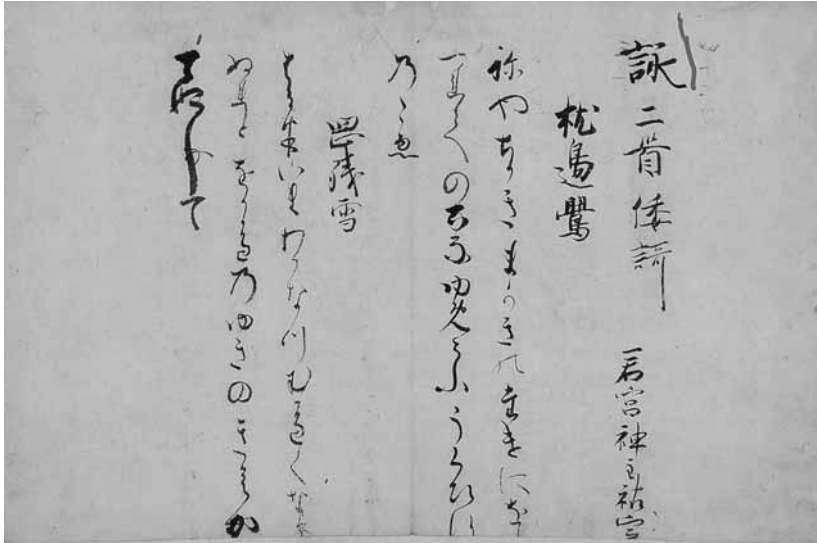


図1 春日懐紙（中臣祐定「枕邊鶯」）

るようになりました。その時点で春日本は一枚ずつばらばらに解体されてしまったのですが、春日本の悲劇はそれだけでは終わりませんでした。懐紙を鑑賞しようとする、裏の『万葉集』は目障りだということで、万葉集面は除去されてしまったのです。現在使われている洋紙と異なり、和紙は裏表二枚に剥ぐことが出来ます。紙を剥ぐことによって、万葉集面は多くの部分が失われてしまいました。

図1は、春日本を書写した中臣祐定の懐紙です。祐定の署名が「定」の部分が切れています。これは、春日本書写に際して懐紙を同じサイズに裁断した際に切られた痕です。また、真ん中に折れ線がありますが、これも春日本として袋綴じにされていた時の名残です。しかし、裏の万葉集は、ほぼ完全に除去されています。このように、春日懐紙の裏表には、この資料が辿った数奇な運命の痕跡が至る所に見出されるのです。

（田中大士）

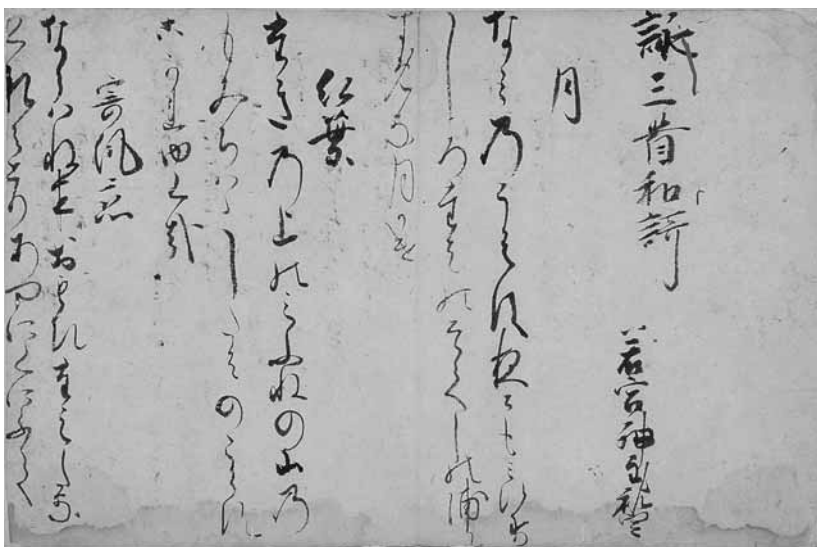


図2 春日懐紙（中臣祐定「月」）